

## 降誕節第8主日 説教 「安心しなさい。わたしだ」 要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023年2月12日

マタイによる福音書 14:22-36

おはようございます。先週は、創立105周年を共々に祝った私たちであります。その私たちに与えられた恵みが聖書の御言葉と聖餐でありました。しかし、この恵みは、この祝いの時以外にも、私たちが普通に、当たり前のように与えられているものです。ですから、子どもだったらきっと、ちえっ！とふてくされたに違いありません。では、私たちはどうか、その答えは、私たちそれぞれの胸の内にあることと思いますが、そこで一つお尋ねしますと、皆さんにとって信仰とはどういうものなのでしょう。この日の御言葉にこうして聞いていくと、それがとても厳しいものであることが分かります。冒頭に「イエスは弟子たちを強いて」とあるように、イエス様に命じられれば、応じないわけにはいかないからです。では、どうして私たちは御心に応えなければならないのでしょうか。それは、私たちがイエス様に捉えられているから、しっかりとつかまれているから、だから、そこから逃れることはできない、私たちが御心に聞き従うのは、この逃れられないがゆえのことでもあるのです。それゆえ、他に選択肢はない。けれども、この、御心への忠実さによって作り上げられてきたものが私たちの歴史と伝統であり、それは、そこに神様の恵みが増し加えられる経験をしたからです。

そこで、この逃れられないということから、あることを思い出すのですが、それは、私の初任地のことであります。私の初任地は静岡県の御前崎であります。静岡に加えて山梨、長野の三県をひとまとまりとするのが東海教区と言われているもので、思い出したのは、ある時、教区の集会で出会った長野県の年配の婦人信徒についてです。初めて会ったばかりの神学校出たての若造に、その方はいろいろなことをお話しくださったのですが、その方は東京のご出身で、長野県の教会附属幼稚園に長く奉職された方でありました。慣れぬ地ゆえのご苦労と子どもたちとの日々の暮らしの喜び、その楽しさについて、実に楽しそうにお話くださったのですが、ただ、その方が学んだ学校は六本木にある東洋英和でありました。あの、花子とアンの舞台となった学校です。ですから、学んでいるのは、いわゆる、良家の子女と言われる子ども

ちばかりで、その方も小さい頃からこの東洋英和に通っていたそうです。ですから、ご実家は経済的にもゆとりのあるお宅であったろうと思いますが、ただ、なんでそういう方が女学校を卒業して以来、長野の田舎で幼稚園の先生をしなければならなかったんだらうと、お話しを伺いながら、そのことが気になって仕方なかったのです。そこでひとつきりお話しを伺った後で、思い切ってお尋ねしてみたところ、すると、これは私も知らなかったので大変驚いたのですが、カナダメソジストのミッションとして設立された東洋英和では、かつては幼稚園の先生も牧師と同じように各地に派遣されるものだったのだそうです。その方が親元を離れ、遠い長野にやって来たのは、それが理由であったわけですが、つまりは、御心と信じ、その地に骨を埋める覚悟でやってきたということなのです。

そして、それはまた、各地に教会を建て、信仰の礎を築いた宣教師たちも同じでした。横浜の外人墓地にも、東京の青山墓地にも、そうした宣教師たちの多くが眠っておられるのですが、彼らが日本に骨を埋めることになったのは、御心に対するその忠実さゆえのことでした。そして、この忠実さとは、彼らがそれだけ神様とキリストの体なる教会を深く愛していたからでもあります。それゆえ、御心に対する忠実さというものは、この神様に向けられた愛なくしてなしえるものではありません。私が先ほどのご婦人のお話を印象深く心に留めているのは、そのことを強く感じたからでもあります。ただ、その方のことを忘れることができないのには、もう一つ、別の理由がありました。それは、その方がとても大らかで正直な方であったからです。具体的に申しますと、いいことばかりをお話くださったのではなく、嫌だったこと、辛かったこと、逃げ出したいと思ったこと、そのすべてを正直に、そして、うれしそうに楽しそうにお話くださったのです。ですから、それだけにまた、私はそこに神様とイエス様に向けられたその方の深い思いを感じないわけにはいかなかったのです。そして、それが、愛であり、忠実さであるとも思ったのですが、ただし、私がそう思われたのは語るその言葉からではありません。その方の体から滲み出たすべてのもの

を通してであり、ですから、私自身改めて思われたわけです。信仰とは斯くあるものか、と。

ですから、私でさえそうであったわけですから、皆さんがその方と出会ったなら、きっと、私も、私もと、私以上にそう思われたに違いありません。ただ、そもそものところで言えば、恐らくは、これまでの信仰生活を通して、私も、私もと、そう思われた方は皆さんの周りにもきっと何人もいたように思うのです。ところが、私も、私もと、そう思った私たちが、では、そう願ったとおりの自分自身になっているか、それについては、皆さんの胸の内にあるとおりであらうと思います。では、その胸の内にあることを一言で言い表すなら、それはどういうことになるのか。それが、イエス様がここでペトロに向けて仰った、「信仰薄い者よ。なぜ疑ったのか」とのこの一言です。そして、この言葉が私たちの胸の内に大きく響くのは、「主よ、助けてください」と叫ぶペトロに向かってイエス様が「信仰薄い者よ」と怒鳴りつけたからです。そして、このペトロの姿こそが私たち自身の姿でもあり、ですから、それについては、私も含め、誰もが互いに口をつぐむしかないのでしょうか。それは、鏡に映る自分に、どうして、どうしてと言うに等しいことでもあるからです。

ところが、この鏡に映る「自分」を見て、私たちが黙ってられないのはどうしてなのでしょう。それもまた、イエス様がペトロに向かって仰った、この「信仰薄い者よ。なぜ疑ったのか」というこの言葉から分かります。それは、私たちは信仰薄い上に、疑り深い者でもあるからです。ですから、私たちが人や自分には厳しく、また、その反対に人や自分に甘いのは、このように疑り深い上に、紙のようにペラペラな信仰しか持ち合わせていないから、つまりは、自分も人も赦せないのは信仰薄い者だからです。そこで、もう一度先ほどのご婦人の話に戻りますが、しかし、その方が笑いながらご自分について仰ったことは、この、ペラペラな信仰という一言でもありました。ですから、そういう自分自身であることをよくよく知りながらも、変わろうともせず、代わり映えしない毎日を歩んでいる、そういう疑り深い、信仰薄い私と、その方の仰ったこととは、言葉の上では何も変わらないということです。しかし、これは当然のことではありますが、もちろん、その方と自分が同じであるなどと

は到底思うことなどできません。ただ、そこで一つだけ、はっきり違うと思えることがあったのです。それは、その方がペラペラだと仰るその信仰を大らかに、本当に大らかに受け止め、そういうご自身のことを本当に心から喜んでいらっしゃる様子であったということです。

ですから、斯くありたいと、そう強く思ったのは、その大らかさに惹かれてのことでもありますが、けれども、この大らかさの中にし映し出される私自身はどうなのか、それは今のことでいえば、代わり映えしないどころか、髪は白くなるし、顔はたるんでくるし、かつて望んだものとはまったく別のもののように思えるのです。従って、それは、褒められたものでもないし、また、自慢すべきものでもない。ただ、それがありのままの自分である以上、自分ではどうすることもできないのです。けれども、そこに甘んじているのも我慢ならない、そんな声が日常的に聞こえてくるわけです。しかし、それでも一向に変わる気配すら感じられない、むしろ、最近では、自分で言うのもおかしな話ですが、開き直っているわけではなく、言われ続けたからでもあるのでしょうか。ああ、それもいいのかと思う時があるのです。ですから、それは単にペラペラなだけでなく、私の場合は、ペラペラの最上級ということにもなるのでしょうか、ところで、私ほどではないにせよ、皆さんがご自身の信仰を、もし、ペラペラな信仰だとお感じになっているとしたら、そういう自分自身のことを赦せますか、それとも赦せませんか。では、赦すことができないとしたら、それはどうしてなのか、また赦すためにはどうすればいいのでしょうか。イエス様がペトロに語った「信仰薄い者よ。なぜ疑ったのか」とのこの言葉は、この、どうしてなのか、どうすればいいのか、ということへの答えを与えてくれているように思います。

夕刻が迫りつつある中、弟子たちは、対岸に行くようにとのイエス様のお言葉に従って、せき立てられるように広大な海へと舟を漕ぎ出していったわけです。ところが、一晩中漕ぎ続けたにもかかわらず、対岸に辿り着くことすらままならなかった、これがまさしく教会の姿です。そして、その時の弟子たちの状況について、御言葉は「舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた」語るのですが、つまりは、逆風の中を一晩中過ごさねばならなかったのが弟子たちで

あったということです。そして、世が白々と明け行こうとするその時、イエス様はこの弟子たちの元へと向かったわけですが、ところが、自分たちの方に向かってくる何かを見つけて、弟子たちは、それがイエス様だとは分からず、恐怖のあまり「幽霊だ」とそう叫んでしまったというのです。ただ、疲れ切った弟子たちがそう思うのは無理からぬことでもありました。しかし、疲れ切っていたとは言え、弟子が師を見まちがうというのは褒められた話ではありません。ところが、弟子たちのこの間違いに対して、イエス様は何と仰ったのか、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と、恐れおののく弟子たちに向かってすぐにこう仰ったというのです。ですから、御言葉の語るこの「すぐに」というところと、イエス様が仰った「安心しなさい」というところに、私たちの誰もがあらゆる局面において望むものが言い表されているように思います。そして、そうした局面において私たちが経験することが、イエス様ご自身を深く知ること、知らされるということでもあります。つまりは、それがイエス様に触れるということでもあるのです。

ですから、イエス様に触れるということは私たちを非常に大胆にさせるものでもあるのでしょうか。その後のペトロの行動からそのことを見て取ることができるのですが、それは、この大胆さこそがイエス様と触れ合った私たちがその次に求めたくなるものでもあるからです。つまりは、イエス様の力にあやかろうとすること、イエス様と同じようになろうとすること、それは、信じればこそ、信じて聞き従えばこそその率直な気持ちでもあります。ただ、その思いというのは、ただひたすらに、一途に、というものではありません。忠実さと独りよがりなものとは交ぜになったものだと思います。ですから、その独りよがりなところについては、イエス様からも何か一言あってもよかったのでは、と思うのです。ところが、そこでイエス様の仰ったことは「来なさい」というこの一言でありました。ですから、この一言がペトロをさらに大胆にさせることにもなりました。御言葉はそれが怖々であったのか、堂々としてなのか、水の上に立とうとするペトロの第一歩については詳しくは語りませんが、けれども、水の上に立って踏み出す2歩目は、1歩目とは比べようもないくらいに自信に満ちあふれたものであったろうと

思うのです。それゆえ、また1歩、そして、また1歩とイエス様に近づくペトロのその足は自信にみなぎっていたに違いありません。すると、どうでしょう。そこに現実を突きつけるかのように、強い風がペトロに吹き付けたのです。そして、ペトロはたちまちの内に怖じ気づき、沈みかけ、悲鳴を上げ、そこでペトロが思わず口にした言葉が「主よ、助けてください」というこの一言でありました。

こうして自信満々でイエス様に近づいたペトロは、自らの信仰がいかにペラペラであるかを深く自覚させられることになったのですが、従って、イエス様を舟に迎え入れた弟子たちが、最後のところで、「本当にあなたは神の子とです」といったこの言葉は、打ち砕かれ、改めてイエス様の力を深く知った者の言葉だとも言えるのでしょうか。ですから、そう考えるなら、ペトロに向かってイエス様が仰った「来なさい」というこの一言は、そういう意味でペトロ初め弟子たち一人一人に自らを知らしめるためであったということです。つまり、あえて失敗をさせて、その自信を打ち砕き、その力を見せつけようとした、それは、イエス様に弟子たちを従わせるためであった、ですから、最後のところで弟子たちが「あなたこそが神の子です」と語ったこの信仰告白は、その忠実さ、従順さの表明であったと、そう考えることもできるのでしょうか。そして、そう考えられるのは、私たちの信仰がイエス様と神様の御心に聞き従うべきものである以上、このように厳しい一面を持っているのは間違いのないことでもあるからです。

しかし、本当にそうなのでしょうか。イエス様と神様の御心がそのように誘導的なものであり、私たちの揚げ足を取ってまで、ご自分の言いたいこと言い、うむも言わさぬ形で聞き従わせようとするものなのでしょうか。イエス様が「信仰薄い者よ。なぜ疑ったのか」と仰ったその言葉は、見捨てられなくなければ、聞け、というような、そういう乱暴なものなのでしょうか。この日の御言葉が示すように、御心に聞いていくと言うことが厳しいものであるのは間違いありません。それは、有無を言わさないところがあるからです。そして、先程来お伝えしているご婦人の生涯がまさにそうでした。しかし、私などが想像もつかないような人生を、そして、恐らくは、御心に忠実に、それも、どこまでも忠実に歩まれたのがその方でありましたが、にもかか

わらず、その方が大らかに仰ったことが、私の信仰はペラペラな紙のようなものよ、というこの一言であったわけです。けれども、ご自身の信仰についてペラペラな紙のようなと仰ったその言葉には、どこか自信がみなぎっていたようにも思うのです。それは、自分自身の信仰はペラペラであっても、生かされてきた、赦されてきた、導かれてきた、そして、そこにイエス様が間違いなく共にいてくださっていた、その方の穏やかな笑顔を忘れることができないのはそれゆえのことでもありました。ですから、その方の生きた現実がどれほど厳しくとも、その物言いは優しく、大らかであり、それゆえ、その方の周りの人々は、その笑顔によってきっと何かを感じた似違いありません。そして、その方をしてそうさせたものがイエス様でありました。

その方が自らの信仰についてペラペラと仰っていたように、私たちは、本当に信仰薄い者です。そして、それは、「主よ、助けてください」とそう叫ばずにはいられない現実を生きているからです。それゆえ、その都度、「なぜ疑ったのか」と問われ続けることにもなるのです。けれども、その繰り返しの中で、本当にいい顔になっていく、それは、ペラペラな信仰しか持ち得ない信仰薄い者に「信仰の薄い者よ」と語る以前に、イエス様の力強い御手が沈み行く者をがっちりつかまえてくださっているからです。ですから、その方との出会いは、私に信仰の力とその可能性を教えてくださいのように思います。そして、それが御言葉がここで私たちに教えてくれているものだとも思うのです。ですから、私はイエス様のお顔もそのお姿もまだ見たことはないのですが、自分で勝手に思っているところは、今日お伝えしたご婦人のようなお顔ではないかということです。それゆえ、その姿が信仰を持って生きることの一つの答えであると、私はそう思うのですが、ただ、そこで私たちが忘れてならないことは、そうした私たちの歩みがこの地上において完成はないということです。つまり、信仰とは未完成のままのものであり、だから、ペトロのように何度も何度も、信仰薄い者よ、なぜ疑ったのかと問われ続けなければならないのです。そして、イエス様がそう問い続けるのは、私たちの信仰が未完成であることをなじり、責め立てるためではありません。それは、私たちの人生も、その信仰も、そこには必ず余白があるからです。そして、その余白をいのように、本当

にいように、色を入れ、線を入れ、一つの形にしてくださるのがイエス様であり、神様であるからです。

ところが、私たちは自分で自分の人生を完成させようとする、それは、人生が自分だけのものだと思っているからです。そして、その私たちがペトロのように「主よ、助けてください」と叫ぶのはそれゆえのことでもありますが、それは、イエス様が側にいることを知っているからです。けれども、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」と仰るイエス様のこの言葉だけで満足することができない、もしかしたら、私たちにはそういう歪んだ自立心のようなものがあるようにも思うのです。しかし、自分だけの力で人生を完結できる者は一人もいないのです。それが証拠に自分で棺桶を担いで死んでいける者はいないからです。そういう意味で、私たちの信仰も私たちの人生も、未完成なまま終わるしかありません。けれども、未完成なままだからこそ、未完成であればこそ、そこに現されるものが人生の奥深さであり、また、信仰の豊かさでもあるのです。それは、そのために私たちを導き、係わってくださっているのが私たちの主イエス様であり、そして、その周りにはイエス様ががっちりつかまれ、その手の温もりを日々感じる私たちがいるからです。そして、このことを経験として、また事実として世に伝えているのが私たち主の教会であり、イエス様はそのためにもまた、私たちを一塊として、厳しくも大らかに最後までその歩みを共にしてくださっているのです。そして、そのことを最も強く、最も確かに知らされる時と場が、今こうして私たちが献げる礼拝です。そして、それは、御言葉と聖餐が私たちに当たり前のように与えられていることから分かります。

このように、その私たちと共にいてくださっているのがイエス様でもありますが、まただから、私たちは繰り返し繰り返し聞くのです。「信仰薄い者よ」と。けれども、その余白をイエス様が埋め、終わりへと向かうその歩みを通し、私たちを完成へと導いてくださっている、それが「信仰薄い者よ」と言われている私たちなのです。まただから、私たちの将来はこのイエス様によって開かれていくのです。そのことを心に留め、一步一步、新たな日々を進み行く私たちでありたいと思います。祈りましょう。